慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	蕩児と覚者 : Huxley小論
Sub Title	Prodigal and Sage : A critical essay on Huxley
Author	上村, 達雄(Kamimura, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.16, (1963. 10) ,p.58- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00160001-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

蕩児と覚者

——Huxley 小論——

上村達雄

序

Huxley の描いたいろいろな人間タイプの中から、二つの対極を選んで、その一方を蕩児と名づけ、他方を覚者と名づけてみた。しかし蕩児と云い、覚者と云い、こゝでは決して厳密な定義のもとに、一定の内包を持った言葉として用いているわけではなく、それぞれ類似の人物をタイプとしてとらえ、便宜な名前を冠したまでである。従ってこのどちらにも属さないタイプ——たとえば、"Point Counter Point" の Philip のようなタイプを、仮りに懐疑的智識人と呼ぶのと同じくらい大まかな、しかし便利な命名であると考えたい。とにかくこの二つの正反対のタイプが彼の作品の中で、どのような経過をたどって現在に至っているかを、やゝ克明に、忠実にあとづけてみたい。他の豊富なタイプを省くことは、Huxley に対して公正を欠くことになるが、論旨を簡略にする必要上やむを得なかった。こゝでは個々の作品の価値を論ずるのではなく、個々の作品を通してあらわれる顕著なタイプを論じながら——登場人物を作者と同一視したがる素朴な衝動によってではなしに、作者と作物の間に、どんなに間接的であろうと厳存する血のつながりをたどって

――作家 Huxley を捕捉しようとするのである。

すでに生涯の晩年にある彼の、その時期その時期に受けた賞讃や非難は別として、いま彼の姿を全体としてふり返ってみると、ある程度共通の現代を生きて来た者のひとりとして、一種の畏れのような、また痛みのような何か云い難いものを覚えるのである。

一

Huxley (1894―) の初期の短篇集 "Mortal Coils (1922)" に "Gioconda's Smile" という佳編がある。頃は第一次大戦直後、主人公 Hutton はロンドン郊外に広い土地を持ち、その経営は管理人に任せたまゝ、自分は「文明に及ぼす疾病の影響」などといったテーマで著作に従事しているが、筆は遅々として進まない。それよりも彼の生活の中心には情事があるようだ。相手の身分職業を問わず、好機至れば秋波を送って何とかものにしてしまう。そういう中年の蕩児 Hutton には病身の妻があり、ほかに近在のこれも地主の老嬢 Miss Spence がいて、ときおり Hutton 家を訪れては病身の妻をいたわってくれている。Hutton はこの老嬢が自分に思いを寄せていることをうすうす知ってはいるが、ローマの女傑とモナリザをつきまぜたような彼女の微笑が気になって、いつになく尻込みしている。のみならず彼の目下の恋人は無智な下町娘の Doris なのである。Doris と彼は人目をしのんで逢瀬を重ねている。ある日招きに応じて Miss Spence が Hutton 家の昼餐に加わる。デザートの赤すぐりの実を食べ過ぎたことから、病身の妻は心臓衰弱のために急死してしまう。Hutton は妻を葬ったのち、Doris と秘密の内に結婚式をあげる。そうとは知らない Spence は、ある日訪れて来た Hutton に、激しい雷雨の中で求婚するが、Hutton はほうほうのていで逃げ帰り、Doris とともにイタリーへのがれて、フロレンスの近郊に家を借りて住む。そこでも彼は Doris 以外の女に手を出しているのだが、ロンドンでは Hutton が妻を毒殺したのだという噂が流れている。噂の張本人は Miss Spence であるが、やがて警察が動いて Hutton は逮捕され、死者の解剖が行なわれ、砒素による毒殺の事実が明らかになる。Hutton 家の温室に殺虫用の砒素が発見され、Hutton は死刑に処せられる。そのあと Miss Spence はかゝりつけの医師に問いつめられて、Hutton 夫人に毒を盛ったのは自分だ、それもあの日の昼餐のあとのコーヒーにこっそり入れて、と告白して泣き崩れる。

この作品のかなめをなす悪女 Miss Spence の性格、生活環境、愛の執念について作者は最初からモナリザの名のもとに煙幕を張って、読者を寄せつけないが、そうした一面性はかえって、もうひとりの人物 Hutton を鮮かに浮かび上らせる結果となり、われわれはこの蕩児の心の中に深く踏み込むことになる。この Hutton 氏の生活たるや、夫としては妻に対する完全な不実、また愛の名においての情事もそのじつ中年者のいい加減な浮気のくり返しにすぎず、内心は退屈で仕方がないのだ。本当の意味では勤労したことがないから、自身の農地の管理についてはおそらく素人も同然、たまに農地巡察を発意しても三日と続かない。また自宅にりっぱな書庫を備えるほどの読書人でありながら、その著述もどうやら不毛に終るらしい——そういった生活、Hutton 自身の反省によれば、「いままでに一度も大きな悲しみや、不快や、驚きによって乱されたことのない、明るい、平穏な生活」[1]——を、額の毛がシェイクスピアの肖像画のように抜ける年齢まで続けて来たこの人物は、蕩児の名に充分値いするであろう。Hutton 夫人の急死を聞いて小娘 Doris が寄せて来た稚拙ながら体当りの愛の手紙を読んだあと、この蕩児の内心の声はこうつぶやくのだ。

「かつて俺は自分のことを快楽主義者（hedonist）だと信じていた。だが快楽主義者であるためには何ほどかの理性の行使と、予想される快楽の慎重な選択と、予想される苦痛の回避が必要なのだ。だのにこんどの事（Doris との情事……筆者）は理性なしに、それどころか理性にそむいてやってしまったのだ。なぜと云って、俺はもう事前にこういったあさましい情事には何の面白味も、何の悦楽もないことをよく知っていたのだ。それなのに俺はいつもその都度、とりとめのない渇望に負けて、相変らずの愚にもつかない行為をくり返してしまうのだ。家内の小間使いのマギーのときも、農場の娘イーディスのときも、ロンドンの給仕女プリングルのときも、その他十指に余る場合のどれもみんなそうだ。みんな陳腐で退屈だった。事前に見当がついていた。いつもわかっていたんだ。だのに……だのに……。一向にこりないで……。[2]」

Hutton の行為の原動力はいつも受け身な、屈服という形をとる。とりとめのない渇望に屈服して仕方なしに行動する。Miss Spence が雷鳴のとどろきの中で、情熱の美徳を強調して、Hutton に愛を強要するとき、彼が拒んで逃げ出すのは、Spence に誘惑的牽引を感

じなかったからである。それを感じたときには、Doris との新婚生活のさなかでも、果物摘みのナポリ女のもとへふらふらと階段を下って行く。彼は Doris に云う。「われわれは気違いじみて人を愛するなんてことはないんだってことが、いつになったら君たち女にわかるんだ？　われわれが欲しいのは静かな生活（a quiet life）だけなんだ。それを君たちはわれわれに許そうとしないんだ。」[3]

こうして Hutton は、放蕩――悔恨――静かな生活への憧れ――放蕩の際限のない巡還を、自らの力では断ち切り得ず、死刑という他者の力によって終止符をうつ。同じような惰性的な放蕩に明け暮れしながら、悔恨の段階で自らの力によって、「静かな生活」へ到達しようとする人物は、"Those Barren Leaves"（1925）の中の、[4]社交界の花形 Calamy である。しかし論旨を整理するために、年代的にはさらに三年後に出版された "Point Counter Point"（1928）の中の Hutton 的人物を先にとあげることにする。この多様な人物が目もあやに出没する一巻の絵巻物の中に、私は老若二様の Hutton を見出す。老人の方は Sidney Quarles であり、若者の方は文芸雑誌の編集を手伝う青年 Walter Bidlake である。

老 Quarles は Essex に領地を持つ貴族で、上院議員として政界に出るが、もともと実力がないためにじきに失脚して、政治を離れ、土地の管理をやったり株に手を出したりして財産を失いかけ、ようやく自分の本来の使命が著述にあることを発見して、「民主々義の歴史」という途方もない大作にとりかゝる。それには古代東洋の滅亡した小部族の自治形態もくわしく調べる必要があって、大英博物館に通う便宜のためにロンドンの街中にアパートを借りてある。タイピストの Gladys も日を決めてそこへ通って来るが、タイプの仕事はあまりない。つまり彼女は Quarles の情婦なのである。Hutton における Doris である。Quarles が Hutton と異るところは、その意識の中に情熱の自覚があることである。「Quarles 氏は自分を大いに情熱的な男だと信じていた。……情熱は尊いもので、実際に法的にこれを尊んでいる国もあるのだ。……大いなる情熱人として、（彼は）自分をひたすら高貴な、英雄的な存在だと考えることが出来た。[5]」だがこれは客観的には、はなはだこっけいな、ドンキホーテの情熱にすぎない。燃え尽きる寸前のローソクが放つ一、二回の光輝であり、事実は「肉欲を『情熱』とまちがえて[6]」いるにすぎない。肉欲以外の生活面の空白は、Quarles が自宅の書斎にこもって、書籍の山に埋もれているとき、あたりに人の目がないと必ず引出しからクロスワード・パズルをとり出して、著述はそっちのけで思案にふけるという、うら淋しい挿話がうまく語っている。自分自身の無能に深く絶望しながら、過去の虚名にすがって体面

だけを気にかけながら空しい日を送っているこの老紳士の一切を、妻は見抜いていたし、友人たちもみな知っていた。ただ最後の秘密が残っていた。それさえ、妊娠を知った Gladys が Essex の本宅へ訴えに出向くことによって、明るみに出され、Quarles はショックのために病いを得て、世捨人になってしまうのである。惰性と本能に身をゆだねて、表面の高貴とうらはらな卑賤の生涯をいきる老人 Quarles を楽しげに描いた Huxley の嘲笑の筆は同じ作品の中で、もうひとりの蕩児 Walter を追うとき、苦悩と渋滞の色を示して来る。そもそもこの長篇の第一章は、Walter とその妊娠中の内妻 Marjorie との間に交わされる次のような問答に始まるのである。Walter はある夜会に出かけようとしている。その夜会で彼は最近新しい情熱を傾けている Lucy という貴婦人に会えるはずである。

「お早くお帰りでしようね？」
「あゝ、早く帰るつもりだ。」
「十二時前にね。」
「そうだな、一時にしておこう。」
「十二時半。」
「うまくいったらね。でも保証の限りじゃないよ。あんまり時間通りに帰宅するとアテにしてもらっては困るよ。」
「私を愛していて？　ウォールター。今夜はうちにいて下さらないの？(7)」

Hutton の病気の妻も昼餐会のあとで、Doris との逢引きのために外出しようとする Hutton を引きとめて、同じように懇願している。

「でもなぜ？　どこへいらっしゃるの？……あゝ、お出かけにならないでいただきたいわ。うちにいらっしゃれないの？(8)」

そして Hutton 夫人は夫の帰宅を待たずに、その日の内に Spence の盛った毒のために他界するのである。Walter の場合は相手の Marjorie の心の中に死の不安がある。『『おそらくあの人は私に死んで欲しいんだわ。』私が死んで……あの人の顔をもう見ることもなく、あの人をもうひとりの女といっしょにさせて置くことを。……彼女は何度妊娠を悔いたことだろう。ウォールターは今は自分を殺すわけに行かないかも知れない。だが、子供が生まれてしまえば、そういう事態がいずれにしても発生するだろう。[9]」懇願する Marjorie をふり切って外に出た Walter の気持は次のようだ。

「犯罪の現場から逃れる犯人、犠牲者の光景から逃れ、共感と悔恨から逃れる犯人もこれほどの深い安堵は覚えないだろう。彼は自由だ。記憶と予感から自由であり、二、三時間は、過去と未来の存在を認めることを拒む自由がある。どこであろうと自分の体が置かれたその場所でそのとき限りに生きる自由がある。自由だ――だが、その誇示もむなしかった。彼はやっぱり思い出していたのである。逃避はそれほどやさしいことではなかった。彼女の声が彼を追跡していた。……彼は自己嫌悪にかられると同時に、自分に驚いた。『どうしてこんなことをやったのだろう？　だが、彼女が僕を静かにさせて置いてくれさえしたらなァ。……どうして彼女はまともにふるまえないんだろう？[10]』」

こゝには先の Hutton の場合の妻からの逃避と愛人 Doris からの逃避の声調が二重に導入されている。Walter は今となっては静かな生活を少なくとも Marjorie との間には欲している。しかし最初に Marjorie を、のんだくれの牧師との不幸な結婚生活から誘い出して、自分に献身させたのは、当時二十二才、Shelley の詩に感動して理想的な、純潔な愛の生活を営みたいと空想した彼 Walter なのだった。云わば彼は「わざと、自分の感情と自分たち二人の生活をシェレーの詩の手本通りに形成しようとした[11]」のであり、出発点においては愚かしいほど純潔であった。その愚かしさが現実によって罰せられたとき、Walter は一転して漁色の徒となった[12]。貴族の未亡人 Lucy は美しく、気まぐれで、自由であり、常に云い寄る男性を幾人か身辺に持っている。Walter の熱狂的な求愛がついに効を奏して、二人の仲はその社会での周知の醜聞となるが、まもなく Lucy は気分転換にヨーロッパへ旅立って、パリでふと行きずりの

男と交渉をもち、そのことをぬけぬけと Walter への便りに書いて来る。こうして Walter は熱愛の相手からは煮え湯をのまされ、一方彼の母親のあたたかい介抱によって立ち直り宗教的な諦念に達した内妻の Marjorie からは、男としては屈辱的な憐れみを受けるのである。

この Walter にもし中年以後の生活を書き足すとしたら、Hutton に似て来ないだろうか。なるほど Walter は Hutton のように地主ではないし、Hutton は Walter のように雑誌編集はやっていないし、Shelley に心酔したという証拠もない。しかし Walter から Hutton へと否みがたい血が続いてはいまいか？　放蕩と悔恨、それに続く静かな生活への希求――。またもし Hutton に晩年をゆるしたとしたら、老 Quarles にきわめて近いものにならないだろうか？　Miss Spence との情熱問答で、「いや、私には情熱なんてありませんな。」と断言した Hutton も、Quarles ほどの年齢に達したとしたら、燃え残りの肉欲の最後の火照りを情熱と錯覚して、Quarles のように老いの胸を張ってみせたかも知れない。

二

さて次に、先に名前をあげるだけにとどめて置いた "Those Barren Leaves" の中の人物 Calamy へと戻って行かねばならない。

富裕なイギリスの婦人 Aldwinkle がイタリーの Vezza に所有する大別荘に、客として訪れるいろいろな人物の中に、Calamy という名の三十三才の社交界の花形がいる。「髪は褐色、眼は青く、背は高くりゆうとしている。きわめて上流の階級に属し、生れつき富裕で、保証と特権に恵まれた地位を占めて来たことから来るあらゆる輝かし自負を身につけていた。……だが、もの憂げに、横柄で、獲物は料理された状態で彼の口へ落ちて来るので、努力する必要などなかった。両まぶたはねむたげな尊大さで垂れ下っていた。[13]」

当然、別荘に住む女たちから下にも置かないもてなしを受け、ことに女流作家の Miss Thriplow からは求愛される。Calamy はこれまでヨーロッパ各地の社交界で輝かしい成功を収め「いまゝでに恋の圏外にいたという記憶がない[14]」と自称する男でありながら、あるいはそれだからこそ、こゝでも Thriplow の愛を受け入れて、Hutton と同じように、くり返しのにがいあと味をかみしめるのである。その意味では、三十三才の若さで Hutton と同じ中年の惰性の生活を営んでいる。彼もまた理性の行使によって、快と不快を選り

分け、快のみを味わう真の意味の快楽主義者ではなかったのである。彼は別荘の居候で皮肉屋の老人 Cardan に向って云う。

「われわれはバカなことを性懲りもなくくり返すのです。自身ではやりたくもないことを。ほんとうの快楽主義者になれて、楽しいことだけがやれたらどんなにいいか。だが、われわれは完全に理性的にならない限り、快楽主義者にはなれませんからね。いったい純粋な快楽主義者なんてものは、いやしませんよ。今までもいなかった。われわれはやりたい事や、快楽を与える事をやらないで、生涯の大部分をその正反対のやりたくない事をやりながらさすらって行くのです。はっきり覚めていながら、狂惑のそそのかしに誘われて、あらゆる不快や、悲惨や、倦怠や、悔恨に引き込まれて行くのです。[15]」

金と自由があることが、ときにうらめしくなる、いっそ土方になれたらと思うときさえある、と云って吐息するこの青年。馬にも乗れば、アフリカで狩りもやる。漫然とした読書なら超スピードでやってのける。けれどもとり立てて何が自分の特技かと反省したときに、それは「女を口説くこと」making love だと認めざるを得ないこの青年が、[16] Walter——Hutton——老 Quarles の系列に属する蕩児であることは一応理解されたが、じつは、作者は彼を結末において全く異質の世界へ送り出しているのである。その世界が極めて大まかに云って、Huxley のいわゆる「神秘主義」の世界に通じるものであるところに、この Calamy という人間像のもつぬきさしならない重要性——Huxley にとっても、われわれにとっても——があるのである。

一篇のほぼ中程で、Calamy が Thriplow の求愛に屈して、最初に接吻を交わす前後に、まず Calamy のふしぎな形而上性が現われる。

「これは愚行だ、と Calamy は考えていた。自分は本当はこの女を恋してなんかいないんだ。これは時間の浪費だ。実行し、思索をめぐらさねばならないもっと大切な他のことがあるんだ。ほかのことが。人生の気散じな空騒ぎの背後に、ざわめきとおしゃべりの彼岸に、それがひっそりと巨大な姿をあらわしているんだ。だが、その正体は何だろう？　その形は、その名は、その意味は何だろう？[17]」

蕩児が覚醒への第一歩をふみ出したのである。だが、大切な何かとは何であろうか？　読者は七〇ページ待たされたあとでようやくそれが、"the beauty and the mystery"[18]と名付けられたことを知る。その神秘の深淵を洞察し、その謎めいてきらめく美に心眼を見据え、光が闇の彼方からさして来るまで、その秘密を熟視すること以外に、もはや Calamy にとって人生で価値あることは存在しないのだと知る。

十二世紀の末、アッシジの聖フランシスは若き日々を「饗宴から饗宴へと渡り歩」[19]き、夜は「笛又は絃楽器に合せて歌ひながら街頭を彷徨ひあるいた。」だが、二十四才の夏のある夕べ、またしても盛大な宴を張って友人を招き、歓を尽したあげく、歌いながらアッシジの町へくり出して行った、その折、ふと友人に遅れて自分ひとり夜の静かな巷にとり残されたとき、彼は「主」に見舞われたと云われている。「此世と此世の空しきものとに疲れたフランシスの心は、今、全く他の感情を容れる余地がないほどな甘美に充された。……俄然として彼の従前の生活の愚かさが、その対象の欠乏が、その子供らしい空虚が、彼の眼の前に呈露された。」[20] こうしてフランシスは真の生活、つまりキリストにおける生活にはいるために、市外の洞窟にかくれていのり、ついでローマへの托鉢の旅に立ったのである。

ひとり聖フランシスに限るまい。古来、歓楽のさなかから、哀愁に攻められて忽然と宗教的回心を遂げた例は多いであろう。回心の対象と方式とは、それぞれの宗教により、また生活様式によっていろいろであろうが、この Calamy の場合、従って多分に Huxley 自身の場合も、それがキリスト教的なものでないことは、驚くにあたらない。Huxley のもつ知的好奇心と、既成の秩序に対する辛らつな風刺の姿勢は、彼の住む世界に固定していたようなキリスト教とは全く相容れないものであったろうから。

さて、Calamy の云う「神秘」はいかにして洞察されるものなのか？　Thriplow との情事の床の中でしきりに自分の掌を光にかざして眺めている Calamy に、彼女は、「どうしてそんなことをしているの？」と問いかける。[21] すると、Calamy はこんなふうに自分の問題を説いて聞かせる。――たとえば、手なら手という一つのものが、あらゆる別個な存在様式をとり得るということを考えてみる。赤児にとって、手は光をさえぎる一つの形にすぎない。物理学者にとって、手は無数のアトムの集合体である。生物学者にとって、手は細胞の集まりであって、各細胞はきちんと自己の役割を守りながら、全体の生命に仕えている。一般人にとって、手は人殺しの道具

かも知れず物を書くもの、傷ついた人を助けるためのもの、女を愛撫するためのものでもあるかも知れない。ところで、これらの多様な存在様式の間にどんなつながりがあるのか？　生命と化学の間に、善悪とアトムの間に、細胞の集合と愛撫の感覚の間に？　そこには深淵があるばかりだ。各様式は層をなして、つみ重なっているだけで、層から層へのつながりは何もない。つまり分析的思考は、綜合的理解を導かない。

それならどうしたらいいのか？　われわれは自由にならねばならない。そして自由に長期にわたって考え、手なら手を凝視し続け、なお考えねばならない。そうしてはじめて、手が最後には一つのもの、mind なら mind、spirit なら spirit から成っていて、その他の様式は単なる仮象、幻想にすぎないことがわかるだろう。

こうした宇宙の綜合的、一元的な理解に到達せんがために、Calamy は北イタリーのスイスに近い山の中の百姓小屋に、ひとりでこもってしまうのである。聖フランシスの洞窟でのいのりに該当するこの大飛躍には、もちろん Huxley 自身も内々面映ゆい気がしたに相違なく、作中の人物 Cardan および Chelifer をその山小屋へ訪問させて、俗世間の立場から、常識の立場から、あらゆる毒舌嘲笑を浴びせさせ、読者にも溜飲の下る思いをさせるのである。そして、この部分に作者特有の輝かしい風刺が展開するのであるが、大事なことは、作者がそれでもなお、Calamy にひとすじの遠慮勝ちな光明を与えることによって、この長篇を結んでいることである。

「彼ら（Cardan と Chelifer……筆者）とともに自分の昔からの馴れ親しんだ生活のすべが去って行くのを感じた。彼は何か新らしい、未知のものと全くの孤独の内にとり残された。……多分自分はバカだったのだろうと Calamy は考えた。しかし、その輝く峯を望んだとき、彼はいくぶん元気をとり戻した。[22]」

こうして蕩児が覚者に生まれ変ろうとする。さきに挙げた別の蕩児たちが、無頼の生活のあげくに訪れる苦い悔恨の中から、及ばぬものとしてあこがれた「静かな生活」を、自分の力で Calamy は選びとったのである。当時三十一才の作者が、多分に実験的ではあっても早くもこうした人物を創造し――あるいは、Calamy の名において、自己の思想遍歴の到達点を告白し――それを英国人伝来の良識

や、温和通俗なヒューマニティの声と対決、論争させて、それらから浴びせられる命とりともみえる批判や、痛快な巧妙なあてこすりの下を、満身創痍ではあってもともかくもくぐり抜けさせ、「輝く峯」の展望を与え、「たとえ百万人に三人か四人の同類しかいなくても、自分は自己主張の権利を持つ。[23]」と、もはや絶対的とも云える言葉を吐かせるに至ったことは、きわめて重要である。もし、創作というものに、作者がもっとも根本的な意味で責任をとらねばならないのだとしたら、この一篇のこうした結末は、作者をおびやかし、拘束するはずである。作者としては、Calamy のその後の行程を何らかの形で公けにすることなしには、このように曲りなりにも Calamy を肯定したことに対する責任は、果せないはずである。事実はどうであったか？

その責任は、十一年後の大作 "Eyeless in Gaza"(1936)、およびそれ以後の二、三の作において、独特の仕方で果されて行くことになる。云い換えれば、Huxley のいわゆる「神秘主義」は、これらの作を経ていよいよ固まって行くのである。

三

しかし、もちろん、アルプスに近い山の中にこもった Calamy が、そのまゝの姿で現れるわけではない。それどころか "Eyeless in Gaza" の主人公 Anthony は、もう一度蕩児として出発する。出発するという云い方は適当ではない。主人公 Anthony の幼年時代から、四十四才までの生活と魂の発展を五十四章に分けて綴ったこの作品は、各章の配列をわざと狂わせて、自然的な時間の流れを寸断し、作者の意のまゝに再構成してあるからである。いずれにしても、オックスフォードの学生時代から、一人前の社会学者として著述を業として世を渡るある時期まで、Anthony は内面的にはどうであれ、客観的にはまことに無責任な、したい放台の生活をいとなんで来た。その生活と、その生活がどうして転機を迎えたかを要約して述べることは、むずかしいし、また無意味でもあろう。そうした全経過がこの作品自体なのだからである。

とにかく Anthony がメキシコへ旅立って、そこの山中でふとしたことから、人類学者で医術にも長けた一種の哲人 Dr. Miller に遭遇して、「君は生きて行くことを望むなら、変らなくてはいけない。……君は変る値打ちのある男だと私は思う。[24]」と云われ、人間の霊と肉の間の整合均衡を志向した革新的な考え方を吹き込まれたことが、新生の最も直接の契機であったが、しかし、メキシコへの旅

に出たことがそもそも、今までの生活を「克服して、一切を別の基礎の上に建て直す」[25]必要を感じて、「消極性からの脱出」[26]を試みたからに他ならない。それなら、さらにこのことの動機は何かとたずねれば、すでに二三の評者も指摘する通り[27]、ある晩夏の白昼、別荘の屋上へ飛行機から墜落して来た一匹の犬の死をめぐって、愛人 Helen との間に生じた決定的な破綻が、もっとも大きな原因であろう。しかし、時間をさらにさかのぼれば、親友 Brian の恋愛問題に最初は好意から介入し、のちにはまことにバカげた動機から Brian の相手の女性を奪う羽目となり Brian を自殺へ追いやったことへの自責も働いていようし、もっと見落としてならない点は、Anthony がすでに学生時代から、当時学生の間に人気のあったフェビアニズムや、カトリシズムよりも、哲学として、世界観として、神秘主義に傾倒していたという記述である。[28]

ごく大まかに云えば、この Anthony という青年は、ヴィクトリア朝の春風駘蕩とした時代の余響の内に、世間体だけを重んじて、そのじつはうつろで倦怠感にみちた上流家庭に人となり、学者である父の、いかにも小心翼々とした偽善的な生活態度に反逆して、ある年上の未亡人——天女と妖婦と赤ん坊のまじり合ったような、無技巧で明けぴろげなその生活ぶりは、ふしぎと読者の共感を誘う——と情交をむすび、この女を人生の教師として、無軌道な伊達男の生活に飛び込んでゆく。もちろん、仕事としての学問には忠実に打ち込んで業績もあげており、Hutton や、老 Quarles の場合に著作が単なるヒマ潰しにすぎなかったのとは事情を異にするが、生活の放恣、退廃はそうした智的作業とかゝわりなく進展してゆく。Anthony はその情婦の娘 Helen を愛人として、もつに至るのである。こうした已れの過去を Calamy 流にふり返ったとき、Anthocy は日記にこう書いている。

「だが、私は自由になりたかったのだ。それも自分の仕事のために。——云い換えれば、自由など問題になり得ない世界に、捕われたまゝでいたかったのだ。それも自分の娯しみのためにだ。私は愛よりも、無責任な肉感に執着していた。云い換えれば、彼女(Helen——筆者)が私の目的である超然とした肉体的満足のための手段になることを。またもちろん、その逆に、私が彼女のそういう目的のための手段になることを固執したのだ。[29]」

「愛よりも、無責任な肉感に執着していた。」――この反省の言葉が、いかにしばしば、Huxley の登場人物によってくり返されて来たことか。もう充分であろう。問題は Anthony がどのような方法で覚者への途を歩んで行こうとするのかにかゝって来る。Anthony は Calamy のような隠栖によっては、新生は達せられないことを知っている。彼は Helen の姉夫婦――インドの Poona に英国軍人の家庭を営みながら、怠惰な植民地の暮しに安逸をむさぼっている――の生き方を批判して、こう書いている。「冥想にふける生活というのは、甘美な、遊蕩的な、またへつらいに充ちた Poona（Anthony はこの街を、「不愉快な現実からの抜け穴」とも評している。）での生活ではない。それはロンドンに生きることだ。しかも、そこで、やに下った甘えっ児としてでなく生きることだ。[30]」

Calamy の入山から十一年を経て、より成熟し、より積極性を加えた作者の、Calamy に対する批判と修正がこゝにあると見ていいであろう。今にして思えば、Calamy は「やに下った甘えっ児」であった。しかし、入山は否定されたが、「冥想にふける生活」そのものは否定されていない。大切なことは、「ロンドンにあって」「冥想にふける」ことなのだ。消極性を脱して、知の生活に行を伴わせるのだ。Dr. Millir という、ふしぎに霊肉のバランスのとれた先達に従って、Anthony の今後の生活は、個人的には肉体と精神の関係を日々に正しく調整しながら、学問に精励するとともに、社会的には、大陸におけるナチ・ドイツの危険な台頭を厳しく見守りながら、平和主義者として一般大衆に絶対平和の理念を唱導してゆくことになる。[31]

このような新生活に入った Anthony が、かつての恋人 Helen を依然として身辺に置きながら今後どうして行こうとするのか。あれほど強烈であった肉へのいざないが、どこで断ち切られたのか。古い Anthony はどのように昇華したのか。または、どのように生き残っているのか、いったい、一時的な熱狂昂奮の状態は別として、人間はほんとうにそのように変り得るものなのか。疑問は残る。Calamy の場合にも作者は同種の疑問に答えなかった。ただ、Cardan らの皮肉な揶揄という形で、客観性の関所を設けたのみである。Anthony の場合には、皮肉を云う Cardan すら登場しない。ということは「積極性」を得た代償として、客観性を喪失したということなのであろうか。なるほど、終末近く、Anthony の次の言葉は、ほしいまゝな前半生への決別の辞としてみごとである。

「自分は生活全体を無意義であるか、さもなくば、たちの悪い冗談であると見なすことを、自分から望んでやっていたのだ。そうだ

自分から望んで。たしかにそれは意志の行為だった。もし実際に、一切がナンセンスや冗談だとするなら、自分は手当り次第に本も読もうし、ふざけた批評に腕もふるおうし、また自分と寝たがっている手近かな女と寝たところで、何の悪いわけもないはずだ。だが、もしナンセンスではないとしたら、もし何かの意義があるのだとしたら、自分はもう無責任な生き方は出来ない。自分に対する義務と、他人に対する義務、および物ごとの道理（the nature of things）に対する義務というものがある。かゝる義務の遂行に、女と寝ることや、無差別な読書や、第三者的な軽口は妨害になるのだ。[32]」

しかし、それなら新たに見出した意義とは何か？　Anthony は人生に何を求めて行くのかと云えば、

「他の生命との合一。あらゆる存在との合一。なぜなら、あらゆる存在の下に、無数の同様な、しかも個別の型の下に、牽引と反撥の下に、平和が存在するからだ。……あらゆる個人的生命を超えた、暗い真空としての平和、しかもそれ自身いっそう強度な生命の一形式。その遍在性のゆえに、その無目的、無欲求のゆえに、普通の生命よりいっそう豊かで、上質の生命。[33]」

平和と云い、生命と云い、それは普通の政治的な、また自然科学的な概念をはるかに超えた、もはや通常の言葉を以ては律し切れない彼岸的なものである。言語による客観性を手がかりとしなければ伝達出来ない思想感情を超えて、純粋に個人的な、云わば禅における「不立文字」の境地を、Anthony は伝えたいかのようである。文学は自爆して果てなければならない。

四

Anthony のその後を示す人物として Huxley の作中に現われるのは、"After Many a Summer"（1939）におけるアメリカ人 Propter である。もはや Propter には蕩児の痕跡は全くなく、カリフォルニアの原野に最初から覚者として登場する。「反対宗教改革運動小史」という名著の著者として聞こえている彼 Propter は、機械文明の恩恵からなるべく遠い土地をと志して、カリフォルニアの谷を選び、

こゝに粗末な小屋を建て、太陽熱を利用して自家発電をやり、小さな木工場を小屋の隣りにもち、そこで、近くに群居する果物摘みの移住労労働者のために、椅子などを作ってやったり、彼らの生活環境の改善を農場主に訴えなどして、ゆくゆくは彼らのための Community を作ろうとしている。十九世紀中葉、New England の沼沢地に小屋を建てて、ひとり住った Thoreau と、「新しき村」の人々をないまぜたようなこの Propter は、しかしまず第一に、著しく政治的である。彼によれば、独裁者どもにふみにじられて動乱を続けるのはヨーロッパばかりではない。アメリカもまた一九二九年の大恐慌から立ち直るためには、軍備拡充による景気恢復策によらざるを得ず。このことは政府の権限の強化を招き、またその被護のもとに膨脹してゆく大企業の勢力を増大させ、ひいてはその下に働く人々の自立精神を奪い去り、アメリカ建国の理想であり、"Jeffersonian democracy" のかなめであった個人の自立と尊厳は、いまや著しく犯されている。Propter が近隣の都市から電灯線を引かずに、二馬力の太陽発電機で発電しているのは、都市から出来る限り独立していたためであり、都市から独立しているのは、Jeffersonian democracy を信ずるがためである。「自立が失われれば、それだけ民主々義は後退する。ジェファースンの時代には、大多数のアメリカ人が実際に自立していた。彼らは経済的に独立していたのだ。政府から独立し、大企業から独立し、だからこそ、あの憲法が生れたのだ。」[64]

さて、Propter は人間に三つの次元 (levels) を認める。動物的次元と、人間的次元と、神的次元（永遠性の次元）の三者の内で、動物的次元は無害なものである。食欲は悪ではないし、性も、もしそれが言語という宿命的に人間的な媒介物なしに営まれるなら、（残念ながら、そういう場合はほとんどないのだが）無害である。しかし、ひとたび人間的次元に持ち込まれると、そこに自我という悪が介入し、性のみならず一切のものが、邪悪になる。真や美を追求すると称する学問芸術でさえ、じつはその真と云い、美と云い、自我の中に存するある傾向を客体的に投射して、価値づけたものにすぎないから、自我という悪の束縛から脱してはいない。

従って、本当に悪を捨て自由を得るためには、個人の意識を超えたところにある超個人的意識という実体に到達しなければならない。これが永遠性の次元なのだ。人間世界に深く浸透した言語を捨て、われわれの意識を透明にして、個別性を脱却し、普遍性を、つまり自由を得なければならない。この境地が、「神に囲繞された無」（A nothingness surrounded by god）の境地である。[65]

元来、人間的次元に属する言語を似て、神的次元を伝達しようとするその矛盾には、Propter も気づいている。気づいていながら、

やはり理想とする世界を言語によって伝えようとしないではいられない経緯は、さきの Anthony の場合と同じであり、また禅家が、「不立文字」を旗印としながら、多くの著作を重ねて悟道を説き明かそうとするのに似て、人間の限界点に伏在する避けようもない矛盾を感じさせる。

Anthony の場合、自伝的要素が濃いことも手伝って、作者はその人間的な哀歓に深く立ち入ることが出来た。従って読者は、少なくとも Anthony が新生活の緒口に立つところまでは充分な文学的共感を似て彼に接することが出来た。云い換えれば、Anthony には実在感があった。しかし、Anthony のその後の姿と見られるこの Propter には、りっぱな言葉とりっぱな行いがあるだけで、それを裏づける体温や息吹きが読者に伝わらない。同じように体温の低かった "Those Barren Leaves" の Calamy には、まだしも図式的ながら人としての心の動きが記されていた。しかし Propter にはその図式さえない。従って、一群の Hutton たちから、Calamy を経て Anthony へと曲りなりにも辿って来た蕩児と覚者の系譜は、真の覚者であるはずの Propter に至って、人間から理念に転化する。これは何よりも Propter が Huxley の頭に属し、情感に属していないということの、明白な証拠であると云えよう。もし、Anthony が小説の中で Dr. Miller の指示に従って行なっていた精神と肉体の調整訓練が、その実を結んだのだとしたら、Huxley は確信を以て覚者 Propter の全人間像を提供出来たであろうに。

五

すでに述べたように、Calamy も Anthony も覚醒以後の生活に充分作者の筆が及んでいないこと、まして Propter ははじめから血の通わないロボットの預言者であるということ、このことから、Huxley の体験したと云われる精神革命が、どの程度のものであるかを推測することが出来るかも知れない。それはあくまで、「精神」革命、つまり頭の切り替えであって、情意や肉体にまで達するものではなかったかのようである。ということは Huxley のよって立つ文学的基盤が、構築物の次第に崇高を増す外観にもかゝわらず、革命以前とあまり変っていないということになるのではないか。

Huxley のよって立つ文学的基盤を支える一つの柱は、知性であろう。Hutton のあこがれた「静かな生活」が象徴する認識と観照の

世界がこれである。いま一つの柱は、同じ Hutton によって生活され、それ以後多くの蕩児によって受け継がれた肉の追求、官能の世界である。上田　勤氏のように、後者を軽く考えるわけにはいかないのである。氏は云う、「その資性から言っても教養から言っても、凡そ Huxley ほど肉体的なもの、本能的なもの、原始的なものから遠い人間の少いことは周知の事実であろう。その彼が肉体と本能とを強調するのは、例の自分が持たないものに対する憧憬であろうが……」[36]

果してそうか？　肉体的なもの、本能的なものから遠い、とはどういうことか？　そういうものを、作中の蕩児たちのようには実行に移さなかったということか？　実行に移さないことは、資質がそういうものでないという証査たり得るか？　教養から云ってそういうものに遠いことはあり得ても、資性はもっと宿命的なものではないのか？　初期の短篇以来、連綿とくり返される肉なるものへの苦しい葛藤が、作者の資性の欠けたる部分への憧憬に発すると見るのは、時代の空気に引きずられた結果だと見るのと同じく、文学に対する、またことに作家の内的世界に対する洞察の欠除ではないのか？[37]

こう云ったからといって、もう一方の知性の支柱を軽く見るわけではさらにない。それどころか、この小論では触れなかった Philip Quarles をはじめ、多くの勤勉で理知的で、人生の卑俗混沌から一歩しりぞいて、これを冷静に観察し、ときに嘲笑することによって心足る人物が指し示しているような、超越的な書斎人としての Huxley——人が Huxley の名によって、まず思い浮かべるような Huxley が、一貫して存在することは、何よりもあのぼう大な著作の数が語っている。超人的な勤勉と克己精励の日常生活なしに、あれだけの数の作品が生み出せるものではない。だが、このことから、もうひとりの自然人としての Huxley の、蕩児的性格を見落としてはならない。[38] 私は、これまでの分析を通じて、そうした蕩児的性格が Huxley にかなり強烈であることを云わざるを得ない。彼の中のすぐれた知性人が、そうした暗黒な自然へのいざないに抗して、たたかい続けて来たそのあとの、廃棄ガスのようなものが、あれら蕩児の描写となったのではないか。あるときは Huxley は、先達 D.H. Lawrence の手放しな生命謳歌の哲学に、救いを見出しかけるが、Lawrence と違って、他者の見える彼、科学に敏感な彼、知性の重みを意識する彼は、しょせん動物も人間も区別のない自己目的としての生命を、そのまゝ貴しとすることは出来なかった。ただ、Lawrence からは、現象の背後に統一的な実体を把握しようとする態度を学びとって、自己流に本質探究を始めた。その際の彼の武器は、乗り超えようとしている知性自体であり、それに養分を与える読書

であった。[39] それゆえ、彼が Propter とともに到達した永遠性の次元というのは、ついに知性の産物でしかない。云い換えれば、Huxley の悟りたいとする意志が、いち早くその入口に到達しただけであって、彼のほとんど全存在ははるか後方にある。ダマスコへ信徒迫害の旅に出て、その途次キリストの来臨にふれて、古き人を全く捨てたと伝えられるパウロと異り、Huxley における古き人は死んではいない。戦後の作である "Ape and Essence" (1949) における。あの原爆戦争後の、猿ほどにも退化した人類の、阿鼻叫喚の地獄絵図をひとすじ貫く性の執念を見るがいい。あれもまた、「自分が持たないものに対する憧憬」の現れであるか？

Anthony や Propter は、彼らの見出した清澄な悟道に、自由をたのしんで安住しつづけるかも知れないが、彼らを造型した Huxley 自身は、まことに D.S. Savage の云う通り、「らせん状ではなしに、砂時計のパターンで」変化し、神秘から肉なるものへ、肉から神秘なものへつねに逆転して進むのである。そこでわれわれは、Huxley が骨を折って一転させた砂時計を、まことに造作なく逆転させて見せることが出来る。ほかならぬ Huxley のもっとも早い長篇 "Crome Yellow" (1921) の中の人物 Scogan の論法を、そっくり借用することによって。

「だが、完全、かつ絶対的変化こそ、まさしく、われわれが決して——物ごとの本性上決して達することの出来ないものではないのかね？……人類 (specimens of Homo Sapiens) として、社会の一員としてこうしたわれわれにとって、絶対的変化などといったものが望み得るのだろうか？[40]」

さらに皮肉にも、その Scogan は神秘主義に対して、失望を先取りしているのである。現在の Huxley なら、公式には決して認めないであろう失望を——。

「若いころ、私はいつも——じつにけんめいに——宗教的、美的感情にひたろうと努めていた。私は自分にこう云ってきかせたものだ。この二つこそが、恐ろしく重要な強烈な感動なのだ。もしそれが体得出来れば、人生はもっと豊富に、もっと暖かに、もっと輝

かしく、もっとずっと楽しくなるだろう、と。私はその感情を味わおうと努めた。神秘主義者たちの著書を読んだ。だが、どれもはなはだみじめなハッタリに過ぎないように見えた。――じっさい、著者たちが執筆中に味わったような感動を、自分でも感じられない人にとっては、そういうものは常にハッタリとしか思えないのだ。……神秘主義者たちは、胃袋のくぼみに感ずる豊富な感情を客体化して、宇宙論をつくり上げているのだ。[41]』

Anthony はむしろ、こうした「第三者的な軽口」を無責任に吐き続けることに、堪えられなくなって、飛躍へ踏み切った。だが、Anthony の飛躍についていけないものにとっては、Scogan の右の言葉は、依然として真なのではないか。

けれども、そうした一切をさし引いて、Huxley の姿を、ひとりのモラリストとして眺めた場合、Huxley のディレンマは、ある程度われわれ自身のディレンマではないであろうか。今日の文明社会――そこでは、人間生活から、額に汗する勤労の部面が次第に後退し、反対に余暇と、性的放恣と、無意義感と、未来への莫とした不安が次第にたかまってゆく――にあって、Toynbee の云うごとく、人間の行きつく先は宗教だとしたら、そして既成の大宗教がその要求に応えないのだとしたら、Huxley の辿って来た途と、そのディレンマとは、ひとり Huxley だけのものでないことが、やゝ気味悪く予感されるのではないか。

(1) Huxley's Stories, Essays, & Poems, Everyman's Library. P. 20.
(2) ibid., P. 18.
(3) ibid., P. 27.
(4) "Mortal Coils" の翌年に出版された長篇 "Antic Hay" (1924) の主人公 Gumbril には多少作者の自伝的な面も加えられているが、その情事は Hutton や Calamy の場合にくらべると、何か若々しいエネルギーを含んでいるために、私は Gumbril を蕩児の系列に入れたくない。気の弱い彼が、つけ髭をして The Complete Man になりすまして、目指す女を口説き落とす名高い挿話にしても、また同じ彼の空気入り安楽ズボンの考案にしても、ふざけてはいるが、女と金を何とかして手に入れようという野心があり、情熱がある。この情熱は "Those Barren Leaves" のジャーナリストで詩人の Chelifer に引きつがれている。Chelifer は女と抱擁するときだけ、「いまこゝに、人間的現実の真つ只中に暗くむし暑いどさくさの中心に生きている」という実感を持つ、自分の全生涯は結局「虚無の中をとどまるところを知らずに滑って行く」過程だと考えるニヒリストであるが、また「ロンドンの北ハロウ・ロードの中産階級の下といった環境」の中でもっとも生甲斐を感ずるリアリストでもある。

(5) Point Counter Point, Modern Library. P. 313—4.
(6) ibid., P. 313.
(7) ibid., P. 1—3.
(8) Huxley's Stories, Essays, & Poems, Everyman's Library. P. 13.
(9) Point Counter Point, P. 176—7.
(10) ibid., P. 8.
(11) ibid., P. 8.
(12) なぜ Marjorie との間がそんなに冷却してしまったかについては、Marjorie の一見優秀と思われた文学的才能や趣味が、じつは全くのつけ焼刃であったことの他に、性的不調和が婉曲に云われている。Walter にとっては Marjorie は、「こわごわな衣裳のような女」であり、理想主義の夢破れたいまとなっては、彼の求めるのは「活気ある卵泡立て器」のような女である。Lucy はそのような女であった。
(13) Those Barren Leaves, Aron, P. 14.
(14) ibid., P. 200.
(15) ibid., P. 77.
(16) この青年に、作品の枠をはみ出して、現実の世界に生き出すような実在感が全く欠けていることは、重要な意味をもっている。作中の他の人物—明るいニヒリストの Chelifer、居候で皮肉と機智のかたまりのような Cardan、その他社会主義者や、それを崇拝する貴族の青年などのどれとも等間隔の位置に置いて、ドラマの一つの要素たらしめる必要から、慢画的なアクセントが強くかゝり過ぎたこともあるであろうが、もっと根本的に、Calamy は作者が初めて試みた一つの実験なのである。赤であれ青であれリトマス試験紙は最初の色が鮮明であるほど反応による変化は読み易い。Calamy の生活感の希薄さ、従って純粋な蕩児的性格は、後段における神秘主義的な飛躍を実験的に可能ならしめるための装置でありまた同時にそれを検証するために便利な比較手段、リトマス紙の鮮明な色なのである。作意の印象が強いのは当然である。
(17) ibid., P. 201.
(18) ibid., P. 271.
(19) 阿部次郎著「聖フランシスとスタンダール」改造社版現代日本文学全集 20。P. 506.
(20) 同書 P. 507.
(21) ibid., P. 341. 以下
(22) ibid., P. 382.
(23) ibid., P. 372—3.

(24) Eyeless in Gaza, Penguin, P. 342.

(25) ibid., P. 228.

(26) ibid., P. 344.

(27) D.S. Savage, Aldous Huxley and the Dissociation of Personality, Critiques and Essays on Modern Fiction 1920—51, P. 352—3.
しかし上田勤氏は Savage よりも四年早く昭和十八年に「倫理への意志—A.H. の精神革命—」と題した一文の中で、Savage と同様の分析を先取りして示している。同氏著「現代英国作家論」P. 148—153.

(28) Eyeless in Gzaa, P 71'0—84).
このくだりで、フェビアニズムを信奉する Brian との対話を通じて、青年 Anthony の柔軟な精神の働き、一つの主義や学説にゲタをあずけてしまうのでなしに、もっと広く、もっと深く人生を探究しようとする自由さを知ることが出来る。Anthony には自伝的要素が濃いとすると、これはまさに青年 Huxley の自画像でもあるだろう。そして、そのような自由な精神の伸び切った先端が早くも神秘主義の方向を指していることは、先にふれた "Those Barren Leaves" との関連において、注目に値する。そこでの人物 Calamy が、思索をめぐらさねばならない大切な何かがあることをふいに思い当るのは、作者にとうした青年期の遍歴があったことを知ってはじめて、ややうなづけるのである。

(29) ibid., P. 203.

(30) ibid., P. 312.

(31) Anthony の新生が、このように一面政治的な主張を含んだものになったのは、十一年前 Calamy が入山したころにくらべて、背景としての世界情勢が格段に悪化したことが影響している。従って、Calamy から Anthony への既述の変化を、Huxley の個人的な変化成長にのみ帰することは妥当でない。文明批評的な傾向を最初から持っていた Huxley にとって、この一世代の激しい世界の動きは、批評以前にすでに苦しみであったろう。銃をとって人民戦線に投じた後輩作家も多い中で、彼はしりぞいて絶対平和を説いた。それがエセイとして現われたのが、"Ends and Means" であり、小説の形をとったのがこの "Eyeless in Gaza" である。ただ、後者にあっては、そのような政治的な呼びかけは、小説としてのメディアの制約のために断片的なものに終り、むしろ Anthony のその後の具体的な人間像—それをこそ読者は知りたいのだが—をくらます障害物になってしまった。

(32) ibid., P. 380.

(33) ibid., P. 382.

(34) After Many a Summer, Penguin, P. 109.
Huxley は Lawrence ではない。Lawrence には他者の存在は眼中にないかの如く、自己の世界観が唯一絶対であった。彼の説くところがおよそ近代科学の示すところと正面から矛盾していようと、力強い魔力を放射するのは、主としてその封鎖性、求心性のゆえであろう。しかし Huxley

には他者が見えて仕方がない。真の意味の他者ばかりでなく、自分の中に可能性として存在する多くの他者に彼は悩まされる。この作品も、Propter ひとりを軸としているのではなく、愚昧なお人よしの大実業家、その妾、シニカルな医師、その貧しい助手、小市民的な古文書学者などをそれぞれ軸として、例の如く多元的に展開する。しかも作者の思想を托した Propter という人物は、一度も自己の視点を得て眺め考えることなく、常にこれらの登場人物の誰かによって見られ、聞かれる副次的人物として表現される。なぜ Huxley は Propter の内面に踏み込まないのか？　ここに重要な問題がある。

(35) ibid., P. 83.

(36) 上田　勤、前掲書、P. 123—4.

(37) ほんの一例をあげれば、"The Gioconda Smile" において、Hutton がテラスから庭に眼をやったとき、そこに現われた豊満な肉体の果物摘みのナポリ女に、心をひかれ、ついふらふらと階段を降りて行くくだり（ibid., P. 24—5）を見るがいい。作者にもともと欠けている資質が、あのような自然さで流露するものであろうか？

(38) 作者が作品に現われたような生活を実際にして来ただろうなどと推測して云っているのでは、もちろんない。すべてフィクションであったとしても、一向にかまわない。そうしたフィクションをあのようにくり返し生み出して来たその本体が問題なのだから。

(39) D.S. Savage, ibid., P. 342.

(40) "Crome Yellow", Penguin, P. 145.

(41) ibid., P. 145—6.